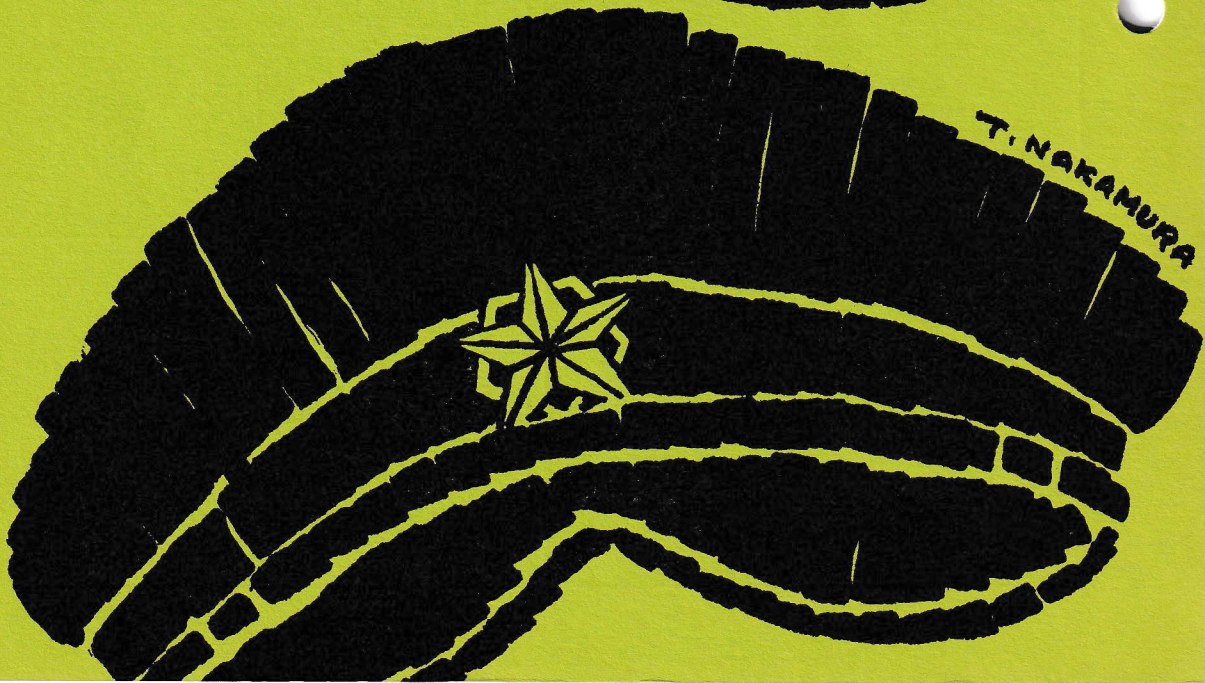
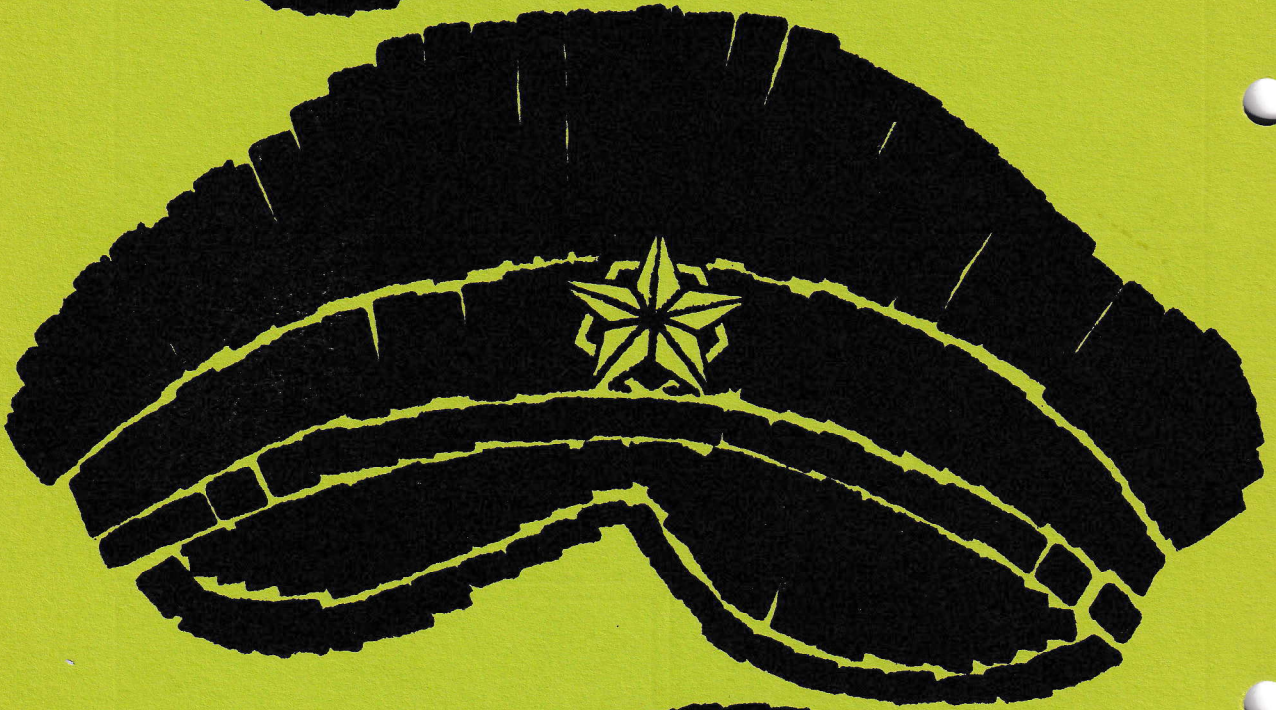


高 静 中
会 窓 同 東 関

5 報 会



T. NAKAMURA

同窓会コンペなど、ご相談ください。

伊豆大仁カントリークラブ 伊豆大仁開発株式会社

代表取締役 石橋 正秋

取締役支配人 安田 正弥 (66回)

静岡県田方郡大仁町浮橋字南松坂1198-1

TEL 0558-76-2401 (代表)

川根 銘 茶

三保乃園 山 菅 茶 店

山 菅 章 雄 (53回)

(村松 正七)

東京都港区南青山1-20-6

TEL 03-403-5760

宝石直輸入元

株式会社 貴 信 貿 易

代表取締役 土 屋 博 (67回)

東京都台東区上野5-18-4

ダイヤオフィス6階

TEL 03-835-3785 (代表)

新東京印刷株式会社

代表取締役 梶 原 由 三 (67回)

東京都中央区八丁堀2-1-7

神鋼ビル

TEL 03-553-8981 (代表)

建築設計・管理

株式会社 ユニオン設計センター

代表取締役 成 岡 英 彦 (67回)

一級建築事務所登録7425号

東京都新宿区西新宿7-1-9 規格ビル

TEL 03-363-8604 (代表)

総合広告代理店

株式会社 ア ド プ ロ

代表取締役 朝比奈 正 三 (67回)

東京都中央区銀座1-15-6 銀座NSビル4階

TEL 03-563-1921 (代表)

米国事業部

イリノイ州シカゴ市ウエストスクール街2031

ジャパンビジネスサービス社内

建築設計・監理

株式会社 奥野建築設計事務所

取締役会長 奥 野 孝 (53回)

取締役社長 奥 野 進 (56回)

取締役副社長 吉 川 善 吉 (56回)

本 社 東京都台東区寿2-5-12 加瀬ビル

TEL 03-842-6831 (代表)

静岡事務所 静岡市安東2-8-14

TEL 0542-46-9378

建築コンサルタント・設計施工業務

建築に関する御相談は御気軽に……

株式会社 大 雄

取締役社長 奥 野 孝 (53回)

取締役営業部長 奥 野 広 (58回)

本社 東京都台東区東上野2-18-7 共同ビル10階

TEL 03-834-5331 (代表)

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科
人間ドック

ねつ かん 熱 函 病 院

院長 小 坂 博 (67回)

住 所 熱海市春日町12-2

TEL 0557-83-3131

アクセサリースペースと憩いの空間

各種ギフト・ゴルフの商品・記念品

サロン・ド・グリーン

土 屋 晃 康 (67回陸上)

東京都新宿区西大久保3-10 プラザ新大樹ビル

(明治通りと大久保通りの交叉点)

TEL 03-204-1251・1371

巻頭のことは

会長 宮澤次郎

創立百年祭
各種行事日程決まる

昭和五十年六月三日、私共がこの同窓会の結成総会を行ってから満三年たちました。此の間、毎年の総会は常に四百名に余る盛況であり、リクリエーション活動も亦大いに催されて、同窓生の和親と交流が盛んになって参りました。殊に級会が非常に活潑になり、従来連絡が途絶えていた期の方々が級会に集る様になって来た事はまことに御同窓の至りと存じます。これは静中静高の古き良き伝統の強みであると共に、同窓生皆様の熱意の賜物と感銘致して居る次第で御座います。

満三周年に当って会の現状を考えて見ますと、基礎造りが大略出来、形から内容の充実と新しい発展への時期に入ろうとして居ると申せましょうか。その意味で、今後若い期の方々が進んで会の運営に参画されますことを特に期待致します度いと存じます。

今回の会報を、六十期代の若い委員の皆様が企画編集されました事は、その様な趣旨に於てまことに喜ぶべき事と存じます。今後益々、この様な活動を進められます様に希望する次第で御座います。

創立百周年記念祭の日程が正式に決まった。主な日程は次のとおり。

▽10月5日(木)

NHK交響楽団演奏会。会場＝駿府会館、開演＝午後六時

▽10月6日(金)～11日(水)

芹沢銈介美術展。会場＝静岡西武百貨店。

▽10月7日(土)

記念式典、慰霊祭、講演会、祝賀パーティー。会場＝駿府会館。

▽10月7日(土)

資料展、印高祭、招待試合。会場＝静岡

記念式典、慰霊祭、記念講演スケジュール

記念式典

9・10 受付開始

9・20 生徒入場完了

9・50 来賓入場

10・00 開式

開式の辞

国歌斉唱

百年祭実行委員長あいさつ

学校長式辞

祝辞(静岡県知事、その他)

生徒代表あいさつ

校歌斉唱

万歳三唱

開式の辞

11・00 終了

慰霊祭

11・10～11・35

開式のことば

黙とう

追悼のことば(同窓会長)

献花(同窓会長、学校長、PTA会長、生徒会長、後援会長、遺族代表)

記念講演会

講師 村松高次(第50期)

百周年記念NHK

交響楽団演奏会

創立百周年記念行事のひとつとしてNHK交響楽団の演奏会を開催する。この演奏会の趣旨は、静岡地域在住の方々に對する文化的な面での奉仕事業として企画されたもので、スケジュールは次のとおり。

▽日時＝昭和五十三年十月五日

午後六時三十分～八時三十分。

▽会場＝静岡市駿府会館。

▽演奏曲目

①ウエーバー、歌劇「魔弾の射手」序曲

②モーツァルト、ピアノ協奏曲変ホ長調K四八二。

③ベートーベーン、交響曲第七

番イ長調OP九二。

▽指揮＝外山雄三氏。

▽ピアノ＝野島稔氏。

予定曲目終了後、本校校歌、追送歌、応援歌、新応援歌等(編曲は外山雄三氏に依頼の予定)の演奏について、学校側ではN響側に依頼している。

静中静高百年史

編集着々と進む

静中静高百年史の発行準備が着々と進んでいる。静岡大火や大空襲による資料の焼失で編集は予想以上に難行したと伝えられるが、各位の並々ならぬ協力で、ようやくラストスパートの段階に入っている。記念式典に間に合うよう発行スケジュールが組まれているが現在、入手希望者の予約を開始している。

同百年史の主要目次は次のとおり。

〈明治編〉

序章 静岡中学校成立前史 ―明治初期の静岡の中等教育―

第一章 明治期の静岡教育。

第二章 各年度の動き。

〈大正編〉

第一章 大正期の静岡教育。

第二章 各年度の動き。

〈昭和戦前編〉

第一章 昭和戦前期における静岡

第二章 戦後の静岡・静岡教育。

第三章 各年度の動き。

第四章 通信制

本文 一、五〇〇頁。

年表 二〇〇頁

価格 五、〇〇〇円(送料別)

希望者は、限定出版のために早目に左記に申込むこと。

静岡市長谷町六六(静岡内)

静岡市長谷町六六(静岡内)

百周年記念名簿の作製

静岡市長谷町六六(静岡内)

静岡市長谷町六六(静岡内)

の教育

第二章 各年度の動き。

〈昭和戦後編〉

第一章 戦後の静岡・静岡教育。

第二章 各年度の動き。

第三章 定時制

第四章 通信制

本文 一、五〇〇頁。

年表 二〇〇頁

価格 五、〇〇〇円(送料別)

希望者は、限定出版のために早目に左記に申込むこと。

静岡市長谷町六六(静岡内)

静岡市長谷町六六(静岡内)

百周年記念名簿の作製

静岡市長谷町六六(静岡内)

静岡市長谷町六六(静岡内)

発行予定日 七月十五日

発行部数 四〇〇〇部

価格 三〇〇〇円

形式 前回と同様

表紙は芹沢銈介先生に依頼、題字「百周年記念号」は同窓会長に依頼する。

その他に各種の行事

や企画を予定

百周年記念行事には以上のほかに「記念館建設」「資料展の開催」「チャリティバザーの開催」「記念碑の建設」「新応援歌の制定」など、いろいろのものが企画されている。

静中赴任のころ

鈴木 厳 夫

昭和二十年の前半は、東京、沼津間の汽車は同一管区ということで、汽車の切符は何とか手に入れることができたが、東京に住んでいた私が、郷里静岡に帰るには一応沼津で降り、更に切符を静岡まで買って、次の汽車に乗る方法しかなかった時期であった。公務出張といふことでも、なかなか静岡まで一度で来ることも容易でなかった時期であった。

昭和二十年六月二十日の静岡市空襲の為に私は家の整理が主なる目的で静岡に帰らざるを得なくなり、神奈川県立第一中学校から、急遽、静岡中学に転勤することになった。七月三十一日付ということであった。

早速、校長先生を訪ねたところまだ、戦争中であり、生徒が宇津の谷トンネルの三菱の工場(?)に動員しているからそちらに行ってもらおうつもりだとのことであった。丁度私が丸子の農家を借りたため、校長先生はそう考えたのであろう。しかし実際には戦争の状況がどうもおかしいということ

西表島紀行

芹澤 正 憲(43回)

その一室を使用した。隣室の土間が職員室であった。一学年全員二五〇名が一室に入つての授業であるため身動き一つ出来ない窮屈な教室であり、しかも二部授業がつづいた。一、二年は長谷の工作室で、三、四年は住友の建物だったと記憶している。(五年生は既に繰上げ卒業であった。)あの時の可憐な一、二年生が現在、静岡・静高同窓会の関東支部の重要なメンバーとして活躍していると聞くと、あのころが一層なつかしく感じて来る。(筆者は五十三回卒業現静岡教諭 国漢)

おどろおどろと

夜もすがら海鳴り

豆台風がこの日本のさいはての石垣港を襲つて今日で三日目。台

風銀座とはよくもはざいたなと感じたり呆れたり、徒らに泡盛のカラビンが増えるばかり。船会社に連絡すると、仕立てるにはまだ無理と言ひ切りながら、ええい出しちゃえっ!とヤケッパチな返事。OKとはかり波止場へ急行。

の生んだ英雄ボクサー・具志堅のカミソリパンチを看ろ!と言わんばかり。

どうやら荒海をのり越えて大原港へ上陸する、上陸?というのはホーバーには船底に車が付いていて港の斜面をカニのようにはい上るからである。

ガイドに頼んだS君がニコニコ出迎えている。早速、探訪の打合せ。S君は教え子一人、先生二人という超過疎のこの島の分教場の先生だ。今世紀動物学会にとって最大の発見といわれるイリオモテヤマネコの学術調査隊、日米独の各隊の外、過般NHKが成功したテレビカメラのかくし撮りなどに同行した、いわば山猫探索にかけがえのないベテランだ。教え子は何をやられても学校一番だということから、つられて教え甲斐があるねえと応ずると、だつて一人きりで

すもの!と背負投げを喰わせるユーモリストでもある。まず東洋のアマゾンと呼ばれる仲間川を遡行してヤエヤマヤシの大群落のあたりでジャングル入りすることをきめる。冬眠中のハブ対策にゴム靴をはき、手袋をする。仲間川の兩岸は行けども行けども巨大なマン

グローブの生い繁ける湿地帯。その中にカジユマル、スオウ、大シ

ダ、サゴヤシ、コブランなどの熱帯・亜熱帯の樹々が壮大なジャングルを構成している。そのジャングルの奥に山猫がひそんでいるのだ。マンガグローブにはさまれた青くよんだ流れにワニを浮かべれば正しくアマゾンの点景!冠鷲が悠々と上空を旋回している。

山猫は去る年、偶然、島の猟師の猪採りのハネワナにかかった。

その皮や、頭骨・上顎骨・犬歯などが研究者の手に渡って、全世界の動物学界は騒然となった。一九六五年、ついにこの山猫こそ、今から七〇〇万前にアンデス山

猫・ベンガル山猫などと共に同じ祖先から進化したネコ亜科・ヒョウ猫類の新種であると断定され、島の名前を冠してイリオモテヤマネコと命名され、学界に華々しくデビューされたものである。

しかも山猫は、その後殺到した各国技術隊の前にもトンと姿を表わさず、忍者のように消え失せて人間の挑戦を拒んでいる。僅かに這般の猟師の標本が唯一のデータとして琉球大学におさまっているのみだ。

ではNHKのかくし撮りしたのもニセモノなのか。ひととき山猫はマボロシの猫になリかけたこともある。しかし各国の技術隊は

山猫の足跡・フンなどを採集、そのデータをそのテリトリーやハンティングエリアなどから割り出し推測して、凡そ三〇〇四〇頭棲息という学問的な断定を下している。

まだその目でまのあたり見たことのないS君はいう。村人のネコ情報は大抵無責任なヨタ話か誤認で信憑性に乏しい。要はそれほど鳥のジャングルが荒れて奥深く人を寄せ付けないということだ。それにネコ自体が夜行性で、極度に神経質で警戒心が強いのがマボロシ説に拍車をかけていると付け加える。

私は目の前のジャングルを凝視した。カジユマルの根に抱かれている白っぽいボロボロ岩は、なんと数百万年前の隆起珊瑚礁の残骸であり、海辺の星砂は、そのロマンチックな形にもかかわらず太古の有孔虫の残骸だと教えられ、この島の大自然の演出する百万年単位の壮大なドラマにひたすら圧倒されつづけた。

その三日間ジャングルの奥深く潜入、湿地にクツをとられたり、イバラで目をついたり、ハブにおどかされたりで難行の末、年代不詳のネコの頭骨とおぼしきものが、フン・毛などを採集してきたが、かなめのネコの正体にはめぐり合わず、依然としてマボロシの

ネコであるの余儀なきに至った。従って動物学究でもない小生が、これらのデータをエクスパートをかりて整理して、このネコをダーウィンの説く適者生存による進化したという生存競争による自然淘汰とつけて探索ルポを交えながら興味的に解明しようとしたとき、

たまたま、二、三の参考文献をくるとダーウィン説に相反する説、ド・フリースの動物界にも植物同様に突然変異によって全く偶然新らしい種ができるという学説、進

水泳部の揺籃期から

黄金時代への想い出

畔柳 安雄 (35回)

ききて 67回 海野 定也
まとめ 68回 萩原多賀男

(文中敬称略)

ことしも、静高プールに夏がやってくる。シリシリと背中を焦がすような、強い日射し。真っ青な空の向こうには入道雲がわき、プールサイドにはイガグリ坊主たちが駆け回る。「どうも敵しさが足りん」と先輩が苦々しそうにつぶやく。「このごろの若いもんは…

」は先輩の口癖だが、プールではしやぎ回る子供たちは、かつてここで、歯をくいしばって猛練習に耐え、たった八人の部員で全国制覇した黄金時代があったことは知らない。畔柳さんは大正九年に卒業、在学中はプールはなく、練習は清水まで出かけて行って海



江尻海岸時代の水泳部 競泳より遊泳主体のころである

で。その後、完成したプールに戻ってコーチとなり、静中・静高百年の歴史の中で、たった一度だけやってきた黄金時代を築きあげた。

◇ ◇ ◇
大正五年、畔柳が入学したころ

から毎年夏の二週間、新入生と二年生全員が清水の江尻海岸で水泳練習をすることが義務付けられていた。当時はまだ江尻には港はなく、砂浜がずっと袖師の方まで続いていた。ここが静岡、清水市民の海水浴場だった。袖師がにぎわ

うのは江尻海岸がコンクリートで固められた以後である。

一年生は全員赤帽。五丁（五百メートル強）泳げるようになると赤白。三保まで三キロの遠泳を達成すると白帽に昇格する。以後、白黒、黒となるのだが、白黒帽をかぶるようになると一人前とされた。

当時はクロールなどというハイカラな泳法はまだなく、「あおり（のし）」「小抜き（抜き手）」といった日本泳法が主体で、静中は水府流を採用していた。

白黒になるためには、単に長く泳げるだけでなく、水府流の流儀をいくつかマスターしなければならず、黒帽ともなれば、免許に次ぐ「目録」ほどの実力があつた。

そのころ県内で水泳が進んでいたのは浜名湾遊泳協会のある浜松地方で、水府流に競技を加えており、畔柳も出かけて行つては手ほどきを受けている。

ところで、このあたりで水泳の歴史についても、ちょっと触れておこう。水泳を初めて競技の形にしたのはイギリスである。泳ぐための堀、つまりプールだが、それを造ったのもイギリスが最初である。

わが国ではスピードを競うので

はなく、武術として起こった。よろい・かぶとに身を固め、弓・刀で完全武装した上で、城の周囲の堀を敵に気づかれぬよう静かに泳ぎ渡るというのが大前提だから、立派に武芸十八般に含まれる。従



全国征覇の快挙を達成した黄金時代のメンバー
上段左から先生、新聞、畔柳、高木、大長、斉藤、伏見、堀井、矢田、森。下段左から小柳、沢野、近藤。

って剣術同様、向井流、神伝流、小堀流、水府流などいろいろな流派があつた。

明治三十一年、横浜の外人クラブと水府流太田派が對抗競技会を開いたが、これが日本最初の競泳。もちろん、わが方は小抜き手で出場。ずいぶん速いといわれたそうだ。

大正九年、アントワープの第7回オリンピックに日本から斉藤観（き）洋ら二選手が初参加、抜き手で百メートルに出場、記録は1分20秒だった。優勝はカワナモク（アメリカ）で60秒4。百メートル泳いで二十五メートルの差が出たという。日本選手がびっくりしたのはクロール、本来、抜き手は顔を水につけず、スイスイというもので、泳ぎという観念はこれしかなかったのだから、頭を水に突っ込みやたらにしぶきをあげ、両手両足をバタバタさせて恐ろしいスピードが出るクロールに魂消えたものだ。

それから日本は猛練習してクロールを身につけ、四年後のパリ大会ではターザンで有名なワイズミューラー（アメリカ）と競り合つて高石勝男が1分3秒で三位に入賞した。

話を前に戻そう。静中にはまだ

プールはなく、水泳部といっても同好者の集まりで、競泳というものもあまりなかった。泳ぎを楽しむといった程度だった。江尻の海水浴場から百メートルほど東の松原の中に各校の小屋があつた。部室のようなものである。西から静中、静商、静岡師範の順だった。

畔柳が四年の時、江尻海岸で競泳の全国大会が開かれた。静中からは畔柳と佐藤春夫が千五百メートルに出場した。プールの競泳に慣れつこになつてしまつている現代つ子には海での競泳方法はちょっと想像しにくいかも知れない。選手は伝馬舟に乗り、千五百メートル沖合いまで行つて、ヨイ・ドンで岸に向かって泳ぐのである。従つてターンはない。千五百メートルという距離を計るのは、江尻一三保間が三キロといわれていたので、ちょうど中間点あたりで伝馬舟を止め、「このあたりでよろろ」という乱暴なもの。

参加選手は五、六十人。号砲一発、伝馬舟から一斉にドボン。抜き手あり、のしありで、みんなてんでんばらばら。ところが前方に大型の貨物船が停泊中で動く気配がなく、どっしり腰を据えている。こうなると水泳障害物レース

だ。やむなく畔柳は貨物船のトモの方を、佐藤はヘサキを回った。理由は単純で畔柳はたまに泳いでいるうちにトモが近くなっただけの話。佐藤はトモにはフロベラがあつて、いつ回り始めるかと思うと「おっかねえ」からだつた。

ところが悪いことにトモの方は激しい潮流があつて畔柳はどんどん流され、上陸したところはゴールから一キロ以上離れた袖師だつた。ヘサキを回った佐藤は八位に入つた。畔柳がトボトボ波打際を歩いてゴールへたどりついた時はレースは終わり、大会関係者は、とうに引きあげた後だつた。選手が一人どこかへ行ってしまったというのにノンキなものだつた。今だつたら搜索隊を編成するやら、大会役員の責任問題など大変な騒ぎになるところだろう。

その後、夏の水泳訓練で腕前を確かめ、デキのいいのを集めて正式に水泳部が発足した。畔柳は卒業、兵役、関東大震災を経て、昭和の初期に静岡へ戻り、市役所へ勤務することになる。今の場所にプールも完成、水泳部らしい歩みを始めていた。

当時、市役所は七月二十日から八月いっぱい半ドンだつた。現在だつたら、それこそ「役人天国」

ここに極まる」などとマスコミに大いに叩かれるだろうが、それほどよき時代だつた。

こうして午後から静岡プール通いが始まる。正式な肩書きはなかったが、監督兼コーチのようなものだつた。

日本の水泳界は昭和三年のアムステルダムオリンピックで平泳の鶴田義行が初めてメーンボールに日の丸を掲げ大いにわき立っているところだつた。

静岡水泳部もクロールをとり入れ、猛練習を積んでいた。コーチ陣は畔柳をはじめ、寄席の入道館の伏見国男、柔剣道教師の大長、歯科医の石上、現県水運理事長の宮崎康之助ら江尻海岸で鍛えた者たちだつた。しかし、悲しいことに一時代前の水府流はもはや通用せず、近代泳法をコーチするため

に文献を引っ張り、よその練習を見学するなど暗中模索の連続だつた。六年ごろから黄金時代の兆しが見え始めてきた。高木茂雄を主将に、新聞六炳、堀井鏡平、斎藤純郎、森博、近藤伊佐男、沢野、小柳といった、たった八人のメンバーだが、いずれも素晴らしい素質に恵まれていた。

畔柳がコーチ陣はこの八人をたたきにたたき、しごきにしごき上げて鍛え抜いた。練習時間は午後三時から日没まで。七コースのプールに八人だから休んでいる暇はない。練習時間は短かいが、密度や内容は極めて濃いものになつた。

翌七年、神宮プールで行われた全日本選手権で、新聞は新井茂夫（立大）と二百メートル自由形で競り勝ち2分18秒で優勝した。さらに四百でも石原田（明大）、米山（早大）を押さえ、4分59秒8で優勝した。中学生が大学生と一緒に泳いでそれに勝つという

ことは大変なできごとだつた。さらに全国中等学校水泳選手権でも、この八人で全種目を制覇してしまつた。恐らく、この快挙はこの先、静岡・静岡の歴史がなん百年続くとしても、二度と達成できまい。

この年、ロスアンゼルスでオリンピックが開かれ、日本チームは四百メートル自由形を除く全種目に優勝、水泳日本の名を世界に轟かせた。全日本で優勝した新聞はこのメンバーに入っていないが、その理由は定かでない。

この快挙を機に大浜に市営プールが完成、県民の水泳熱は盛り上がった。新聞・高木がオリンピック

クに参加したのは、それから四年後のベルリン大会だつた。高木は水球で出場したが、期待の新聞は現地でコンディショニングをこわし、控えの新井と入れ代わつたため出場できなかった。日本はこれまでどのオリンピックでも四百メートル自由形で優勝したことはない。歴史に「もし」は不要だが、新聞が体調を崩さなかつたら、それが実現していたかも知れない。

畔柳は娘さんの体が弱く、プールへ通うチャンスが少なくなったのと、内務省へ勤務が変つたこと

から、九年を限りに長谷のプールから去つた。

畔柳さんは横浜市磯子区汐見台三五〇五ノ五三二に奥さんと二人きりで住んでいる。六人の子福者で、孫は十二人。七十一歳まで神奈川県住宅保全協会の理事長をしていた。七十六歳の現在もいたって元気。三週に二回のわりで1ラウンドハーフを回り、足腰に衰えはないという。

TELは045(751)7150

桜花狂ほひ五題

村松 直(42回)

俳句

朝なさな うたて楽しき桜狩り

そほ濡れて賞で歩きけり山ざくら

桜花ありて月在りて又美酒有りて

月映えて我家の桜散りて乱ひ

小夜すがら

咲きすさびたる桜花愛しむ

和歌

朝なさな うたて楽しき桜狩り

今日は何処の道を拾はむ

小夜すがら

咲きすさびたる桜花愛しむ

わが影に添ふ妻のいとしも

夫婦そろって同窓生

静中も開校以来今年で百年目を迎える。この静中いや静高に女生徒が入学してきたのは、昭和24年4月からである。

以来約30年、現在では全校生徒の3/5を女生徒が占めるという。

男がいて女がいて、まして同窓となれば愛が芽ばえ夫婦になる同窓生がいてもなんの不思議はなからう。

今回はそんな二組の御夫婦を紹介しよう。

藤波真五さん

はるみさん

横浜の閑静な住宅地である磯子区洋光台に藤波真五さん（68期）はるみさん（旧姓大蝶70期）御夫妻をお訪ねした。

お二人が結婚したのは昭和37年2月、出会いはある人による紹介（お見合い）からだったという。

昭和26年、夫は高3、妻は高1元静岡34連隊の兵舎を学舎として一年間、同時期に静高生活を過し

たのだった。

夫は学校時代、山岳部に所属し山登りだけを考える毎日だったという。鍛練と称して現在の駿府公園の石垣を猿の如くよじ登ったり足腰強化のためマラソンに熱中していた。

一方、妻の方はバスケット、バレーと抜群の運動神経にものを言わせ、静高スポーツウーマンの花形だったというが、人と人とのつながりは不思議なもので、誠実な男性と心をひかれ、この女性こそ我が生涯の良き伴侶と、お互いに紹介された瞬間に考え、結婚しようと思った二人の同窓生は、この時点では、残念ながら、まったく顔も名前も知らなかったという。

ご夫妻の高校時代は、現在のようには豊かな時代ではなく、まだ戦争の傷跡が残っている頃であったが、それでも楽しい思い出が数多くあり、今でも生き生きと語って来るという。

三年間、皆勤賞受賞が物語るように、小柄ながら体力抜群の夫は高校二年の正月三日、一年先輩の



越後湯沢にて 向って左から真五さん、はるみさん、大介くん（長男）、かをりさん（長女）

S氏と真冬の富士登山をした。その年始めての登山者ということで測候所の人達から歓迎を受け、疲労も寒さもふっとんだ時が学校時代で一番印象に残っていることだと話す。

又、在学中静高75周年記念にぶつかり、その時の印高祭で市内を仮装行列をしてねり歩いた愉快なこと、あるいは友人達と富士川まですりゃくに行った時のことが印象的だと話すのは妻である。

学校時代はお互いに知らなかったが、結婚してから母校が甲子園に出場した時など、子供の世話

そっちのけで夫婦で応援するが、こんな時は同窓生でよかったなあとしみじみ思うが、反面、寄付金などは人の倍も出さなければならぬので困るとこぼす。

夫婦共、同窓生の場合は一人分で勘弁してもらいたいなあと言談をいうご夫妻である。

縁あって結ばれたのが、私達の場合、偶々同窓生であったのだけれど、人と人との出会いは大切にすべきだと、ご夫妻共々語る。

中3のかをりさん、小4の大介さんの2人の立派な子供さんが、ご夫妻におられるが、もしも、静

岡に住んでいるならば、高校はやはり静高へ入学させたいと思うという。

最後に、ご夫妻にそれぞれの採点をお願いした。

夫は妻に85点、妻は夫に92点。やはり先輩は後輩にきびしい。

同窓生カップル万歳。藤波さんご夫妻の深い愛情に感激して、磯子のお宅を辞去した。（雨宮記）

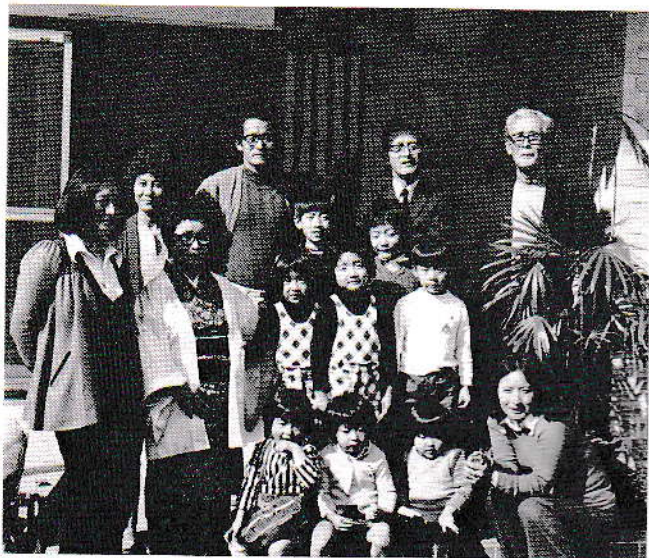
神谷東洋さん

貞子さん

練馬区南大泉町六六四ノ十二に住む神谷東洋・貞子夫妻は、ともに静高六十九期生。昭和三十八年に結婚、その後二人の男の子をもうけ、明るく、オープンな家庭を営んでいる。夫の東洋さんは講談社勤務、妻貞子さんは、いまPTA役員として活躍中である。

東洋さんが貞子さんの存在を知ったのは、高校へ入学して間もないころ。ちょっと痩せぎす、オカッパ頭がよく似合う貞子さんを、登・外校の際に時どき見かけた。

「ちえっ、すましやがって！」と思いがちながらも、自転車通学の彼女の颯爽とした姿が気になって仕方がない。これが、いつしか恋心に



左から2人目が貞子さん、その右側が東洋さん、
その右が長男和洋君、中央女の子2人の右側が二男卓伸君

変っていったようだ。

ついに東洋さん、ラブレターを書くことを決意、書いてはみたが、どうしても手渡すことができない。当時、東洋さんは四HR、貞子さんは一HRだったが、都合よく親友のH君が彼女と同じHRにいた。早速H君に相談、手渡しでもらう。しかし、返事は貰えなかった。こうなったら押しの一手。二度、三度、返事がきた！

映画への誘いにOKが出たのだ。約束の日、東洋さんは三十分も早く待ち合わせた映画館の前に行

った。胸ときめかせて待つ。約束の時間がくる。十分、二十分、三十分……と過ぎて行く。とうとう彼女は現われなかった。

ラブレターを受け取った貞子さんは、当時を思い出しながら「ただだに恥しくて、友人達と運動場で野球をする姿を待たま見かけましたので、彼のことは知っていました。折日正しく、おしやれな感じ」という印象でした。約束の日、約束の時間に、その場まで行

くことは行つたのですが、どうしても近寄ることができず、別の映画を一人で観て帰つたのです」と語る。

居ても立ってもいられない気持ちで数日を過ごした東洋さんは、親友のH君に付き添われて貞子さん宅を訪ねるが不在。プレゼントのアルバムをお母さんに託して寂しく帰る。

はじめてのデートは、清水公園だった。貞子さんは写真を撮ってもらった記憶があるという。二、三度デートをしたが、二人とも東京の大学へ進学。その間、貞子さんの家は東京へ引越しした。大学時代、多摩川ヘデート。ボートに乗った覚えはあるが、いつとはなしに連絡が途絶えてしまった。

そして、ある日、建設会社に勤めていた貞子さんは、同僚の家に遊びに行く。それが偶然にも東洋さんの下宿のすぐそばだった。懐しさも手伝って立ち寄ってみるがすでに東洋さんは引越したあと。大家さんが親切にも移転先を教えしてくれたので、その足で訪ねる。何と十年ぶりの再会であった。

しばらくして今度は東洋さんが静高時代の恩師宅に出かけるが、これがまた貞子さん宅の近く。訪問すると貞子さんがただ一人。

もし、この時一人でなかったなら二人が結ばれることはなかったかもしれない。アルバムなどを開いて、楽しいひとときを過ごした。

その後貞子さんは、ある人と婚約。『さよなら』を告げるべく東洋さんに会う。「お祝いにプレゼントしよう」という東洋さんに従って池袋へ出た。食事のあと、ダンスホールへ。そこで、東洋さんはプロポーズしたのだった。貞子さんもOK。翌日、東洋さんは静岡へ発ち両親に報告、昭和三十八年九月十五日、講談社の先輩の媒約で結婚。三十九年に、長男和洋君誕生、四十二年には次男卓伸君が生まれた。

学生時代は山岳部に籍を置き、こよなく山を愛した東洋さん、独身時代は給料の総てをつぎ込んだというが、いまは、子供を連れて

HR

この頁の初めから五行目あたり、いくつかHRという文字が使われています。HRってナニ？という方も多いと思います。戦後の城内高時代に初めて実施された制度 HOME ROOM の略称です。ひとつのHRは一年生、二年生、三年生各十五名、合計四十五

富士山に登る程度。会社では野球チームに属しキャッチャーを受け持つ。真剣に仕事に取り組むが、家庭をも大切にするよきパパである。ウイスキーを好み、肴には少々うるさいけれど、細かいことは一切言わない人。貞子さんは主婦業に専念、手芸が趣味という家庭的なよきママである。

もしも静岡に住んでいたなら、ぜひ子供たちも静岡に入れたというお二人、子供の教育については、じつと見守るタイプの東洋さん、少しばかり口うるさく、厳しいしつけを心がける貞子さん。年に一、二度原因不明の大げんかをするというが、これも仲のよい証拠。「結婚してよかった」と幸せを噛み締めながら、明るく平和な家庭生活を楽しんでいる。

(原田記)

名ほどで編成され通年制HRとよばれていました。いわば全学年を通じてのコミュニケーションの場ともいえるものだったようです。今回からこの会報の編集に雨宮明生君、原田淑子(旧姓平山)さんが加わりましたが、くしくも、私ともども14HRの顔なじみ。会報編集委に14HR関係ができました。

(飯田 惇 67回)

アラビアの地に

十五年を過して

鼠入 武夫 (52回)

はじめに

縁あって、私は、昭和三十二年から昨年の春までの二十年間の大半をアラビアの地で過しました。

その地に生れ、中学を卒業するまでを過した静岡は、いうまでもなく私にとって、忘れることのできない思い出の数々を持つ故郷であります。

正味十五年の間自分なりに持てるエネルギーをぶつけたが、一日一日を送ったアラビアの地も、また、永久に忘れることのできない、いわば、第二の故郷になった思いがしております。

者から、同窓会の会報にアラビアの話を書かせては、とのおすすみがありませんが、長い間日本を離れていたこともあって、同期の方や同窓の方々に全く無音に過ぎていて、何となく心苦しく思っていたところでもありましたので、会報で久闊を叙することができればと思います、喜んでお引受けした次第で

す。

一、アラビアの地へ

まず私が、アラビアへ行くようになった経緯について触れてみます。

私が初めてアラビアへ出かけたのは、昭和三十二年七月のことでしたが、それまでは、通産省の工業技術院に勤務しておりました。

偶々、この年の春、アルゼンチンの日本ブランド協会の所長交代の話がありまして、私がこれを志望したところ、何となく話が進んで、二カ月程のうちにほぼ内定という形になりました。

そこへ、アラビア石油の創設者となられた山下さんから人を介して、アラビアの石油開発をやろうと思っているからひとつ参加するようにとのお願いがありました。私は、大学では石油工学を修めた関係上、海外での石油開発に参加出来るということ、もちろん望むところであったわけですが、一方で、我が

国の技術を他国に紹介し、プラント輸出を伸ばすという仕事についても大きな関心を持っていたため、南に行くべきか西に行くべきか、仲々決心をつけかねておりました。誠にだらしない話ですが、思案にあぐねて母に相談をもちかけました。この母はつい最近、八十六才の天寿をまっとうして亡くなりましたが、その時母は「一兩日待て」といい、二三日後に私のところにやって参りまして「西へ行くのがいい」との御託宣がありました。どうもこの間に占いをやった形跡があります。母のいうことが全てを決した訳ではありませんが、私も石油の開発に参加したいという気持が強かったので、結果的には母の御託宣に従った形になりました。

当時、アラビアについては何等の知識も持たず、また仕事の面でもまずやらなければならぬのは、サウジアラビア政府との石油利権の交渉でありましたが、これまた適当な勉強材料もなくいわば無手勝流で飛び出した恰好でした。この無知振りのひとつを御披露しますと、砂漠の地へ赴くのであるからヘルメットが必要であると思いい、ヘルメットを用意して行ったら訳ですが、このヘルメットが役に

立ったのは、昭和三十二年七月から翌年の七月までの一年間の利権交渉期間中イエーメンの岩塩鉱床調査を当時の大蔵大臣から依頼されて行った時のただ一回でした。

羽田へ送りに来た友人達から、お前はアラビアへ猛獣狩りに行くのかといってひやかされたのが今でも記憶にまぎまぎと残っております。

二、利権交渉

当時サウジアラビアで石油の開発を行っていたのは、アメリカのいわゆる4大メジャーが持つアラムコという会社で、いわばこの会社が完全に独占的にサウジアラビアで石油開発の仕事を行っており

ました。今でこそオヘックと言われる石油輸出国機構に加入している石油産油国は、石油政策に関する主導権を完全に握っておりますが、当時は石油を生産している会社が石油政策に関する主導権を握っており、産油国側は行政体制も十分整ってはおらず、外国会社に振り廻されていたのが実情でした。こんな状態にあったため、産油国政府には何とかして不利な条件を改めたいという強い願望があったところへ、日本が飛び込んで行ったという恰好になったわけで

す。従って、私達が交渉に入った最初の日に、政府側から既に政府側で準備していた協定原案をつきつけられ、この内容を読んでもみると、これまでのアラムコの契約と比べ、その内容が著しく厳しくなったものでした。我々は、この内容はとうてい呑み得ないとの立場をとってその後繰り返し政府関係者と折衝を重ねた訳ですが、政府側の壁は固く、一時は交渉を断念せざるを得ないとの考えにもなりました。しかし考えてみると、アラムコ契約は二十数年前に出来たもので、石油そのものの対する一国の経済の依存度が低かった時代のものであり、また産油国も石油の重要性に対して認識が低かった当時と比べ、既に時代が大きく変わって来ていること、それに日本とアラビアとの結びつきはこれまでほとんどなく、日本を対象にして話を進めているのはいわば未知の魅力に過ぎないこと等より見て、このチャンスを見逃せば再び石油の宝庫と言われるアラビアにおいて石油の開発へ乗り出すことは出来なくなるとの判断に立つてこの交渉をまとめる決心をした訳です。唯一つ、相手側の条件のうちどうしても呑めないものがありました。それは、石油が発見される

まで毎年五百万ドルづつ鉱区料を払えという条件です。新しい地域あるいは水域で石油を見つけ出すまでには、最低二年から五年位かかるものです。この交渉に先立つて、日本国内でこの仕事のために集め得る見込の立った金は三十五億円で、もし、二年間政府のいい分通り年間五百万ドルづつ払えばこの鉱区料だけでも一千万ドル、当時の円・ドルレートでは三十六億円となり、何も仕事もしないでも国内で集め得る金は二年間で全くなくなってしまふこととなります。そこで、貧乏書生がよくやる手ですが、出世払いの考え方を政府に申し入れた訳です。この出世払いとは、油が出るまでの鉱区料は値引きしてもらい、油が出たらば政府のいう五百万ドルの鉱区料と値引きした差額に一括払いをする、油が出なかった場合には値引き分だけの鉱区料でかんべんしてもらいたいという考え方です。

結局、このやりとりは政府側がおりてくれて、五百万ドルを三百万ドルに値切ることに成功した訳です。

政府との間の話しが大体ついたところで日本政府に交渉の経緯と協定の内容を説明したところ、協定内容がアラムコのそれと比べ著

しく不利になっており再交渉せよとの強い要求がありました。これに對して、アラムコ協定とは時代が異なっていること、対象海域での油の発見には十分自信があること、このチャンスを見逃しては再び海外石油開発の機会は訪れないであらうことを強調し、ようやく日本政府の諒承をとりつけることが出来た次第です。

アラビア石油が獲得した石油利権は、サウジアラビアとクウェイトとの間に横たわる約七十キロメートルの中を持っていた中立地帯の沖合であったため、約五カ月に亘るサウジアラビアとの交渉を終了した後、クウェイト政府とも同じような交渉を行いました。クウェイト政府との交渉では強力なアメリカの石油会社が競争相手として現れたため、条件闘争の形とはなりましたが、サウジアラビアが強力に日本側をバックアップしてくれたこと等もあって、昭和三十三年七月に協定書に調印することが出来ました。交渉を開始したのが昭和三十三年八月初めでしたから、サウジアラビア・クウェイト

三、油田発見までに とった先喰い方式

石油が見つかるまでの鉱区料を年三百万ドル（サウジアラビア・クウェイト両国で）までに値切ることになった。これでも、一日に換算すると三百万円づつの支払をしていかなければならないことになりました。そこで一日も早く油田の発見に漕ぎ着けなければならぬと、いろいろな手を使い、いろいろと苦しい手を打たざるを得ませんでした。探査を行うには海上地震探査を行わなければならぬが、この地震探査を行うには、海上で航行している測定船の位置を常に正確に押えておく必要があり、この位置測定には陸上に二つの電波発信基地を設けなければなりません。一日でも早く仕事をかたづけたいと思い、クウェイト政府との協定調印が済む前にこの電波発信基地の地上測量を開始しました。もちろんこれは、協定調印前で仕事をやる権利がない状態で行ったので、政府に呼びつけられ、えらくお小言を頂戴しましたが、それでも政府の目を盗んでこの測量を続けた次第です。また、海上で行った地震探査の結果の解析をロンドンで行いました

が、どう急いでもこの最終解析結果は翌年の四月にならなければ出てこないという状況でした。これでは時間がかかりすぎて資金の枯渇は目に見えていたので、試掘を行う計画をこの最終結果の出る前に進めることとし、最終結果の出る数カ月前の中間解析を基として試掘をするため掘削契約をとりまとめました。このとり方はいわば家を建てる地所が最終的に確定しないのに建築業者と建物契約をしたようなもので、綱渡りのような計画の進め方を行ったものです。

四、一号井で 油田を発見

こんな形で実際に井戸を掘る準備に入った訳ですが、契約した掘削装置はアメリカのメキシコ湾を昭和三十三年暮れに出航、大西洋・地中海・スエズ運河を通過して紅海に入り、アラビア湾の予定地に着いたのは翌昭和三十四年の五月でした。この時までは一号井を掘る予定位置も確定していませんが、アメリカから動員して来た掘削装置は、この予定位置の水深には、足の長さが足りなくて、現場でこの足を継ぎ足さなければならぬことになりました。そこで中立地帯沖合にある小さな島の島影

に曳航して、ここで脚の継ぎ足し作業を始めたところ、継ぎ足し用の脚を海中に落としてしまいました。早速バハレーン島からオーストラリア人の潜水夫を呼びよせ、落ちた脚を探させたところ、二日たっても三日たっても見当らないということで、あるいは潮流で流されたのではないかという懸念が出て来ました。今ならばこういう場合、水中テレビを使って調べることも出来ませんが、当時はこのような装置もなく潜水夫の報告通り信用せざるを得なかった訳です。こんなことで時間をロスしてはと思い、広告を出して、もし落とした脚を見つけたら日当の他に千ドルの賞金を払うことにしたところ、その潜水夫が翌日もぐり、見つかったという報告をして来ました。見つかった場所を問いつけて見たら、落とした直下の海底にあったということで、結局、この潜水夫が日当稼ぎの目的で時間かせぎをしていたことが判明した訳です。これがいよいよ教訓になって、それ以後は、いわゆる「流れもの潜水夫」を使うことは一切しませんでした。（続く）

（紙面の都合により章の途中で切れてしまいました。お詫び申し上げます。編集部）

各 期 便 り

四二回

例によって「よんにー会」の会合はすこぶる多い。楽しいからに決まっているのだが、大小さまざまなのを合わせる平均月一回にはなる。このように頻繁な理由を考えてみるに、まず第一に、郷里静岡を離れた遠隔の地での仲間会合であることはもちろんであるが、もうそろそろ先も短く、しかも既にのんきな境涯にあつて、いつでもまた何処へでもすぐ出掛けられる者が多いことなどが主な原因かもしれない。

しかし、もっと「結束」のルーツを辿ってみれば、母校が百年に亘る栄光の歴史を積み重ねたその栄誉から来る自負はもとより、在学当時から岳南健児としての意気はすこぶる軒昂であり、結束も特別堅かったのがその根本原因であると信じている。

さてそこで最近の会合の一つを紹介してみよう。時は二月二十八日(火)夕刻より、場所は在京「よんにー会員」の時の一つである新

橋の小料理屋「春」。当夜都合のついた顔触れは、井出多米夫、岩崎康、岩波新平、川勝信美、萩原莊五、坂野隆介、堀夷、宮崎達、宮崎忠雄、宮沢次郎、村松直、森録、柳川太郎の而々に、臨時特別客員としての「くに子」嬢の十四名であつた。

身辺雑事に関する報告やら、遠近在住会員の消息、果ては趣味・娯楽・遊興等の論理的追求や考現学的認識その他に話の花を咲かせて、時間はまたたく間に過ぎてしまった。

ただ今回特記したいのは、前記の森録君は、「よんにー会」の会長で、母校百周年記念行事に関する詳細な報告や打合せをするためにはるる静岡から馳せ参じたもので、その熱意には心から敬意を表する次第である。

次に「くに子」嬢であるが、これは岩崎康さんが同伴したもので、彼が行きつけの寿司屋で意気投合した(ただし清い清い仲)さっぱりとした物分かりのよい、しかも飲むほどに酔うほどにますます愉

快になるOLで、時ならぬ紅一点のご光来には一同年を忘れて色めき立ったのは事実である。

なお、当日はたまたまわれ等の敬愛する大先輩、27期の李家孝氏(静中・静岡同窓会神奈川支部、天下の「江の島会」の会長であり、

関東同窓会の顧問でもある)の葬儀が、築地本願寺で行なわれた日で、参列者の報告並びに謹しんで弔意を表した。ついでに、話が健康のことに及び、「生きているうちが花だ」ということになって面々のおずと複雑な表情を呈してきたが、例によって直さんが突然、

「俺は日頃みんなの厄介になつていたので、必らずみんなのお焼香だけは済ませてから行くからな……」と言ひ出して、腹をかかえて爆笑する一幕を最後に三々五々散会した。(村松直記)

四三回

母校が創立百周年を迎える今年は四三会員にとっては丁度卒業五十周年にあたる。顧りみれば大正十二年四月県内各地より二百名が入学してきた。遠方の者は寄宿舎に入り、東・西からの汽車通学者も多かった。級友の殆んどが明治四十三年生れで母校の卒業回数はずばり明治の年数と同じである。

入学した年の九月一日に関東大震災が発生し、京浜地方は灰燼に帰し、湘南・伊豆・箱根方面も壊滅的打撃を受けた。それで、級友中にもこの方面からの転入学も多かった。

第一次大戦以降の不況も大震災後は更に甚だしく、昭和初期に到るまで投機の過大、景気の急落、失業者の増加、銀行の取付け騒ぎまで起つた。

在学中は静岡の名のごとく、まずは平穩に勉学にスポーツにはげんでいた。旧制静岡高等学校もこの年に設立され、母校からも秀才組が毎年難関を突破して入学していった。運動も盛んで、フ式蹴球部は特に強大であつた。部員外の者も大勢参加して、昼休みや放課後にけりあつたものであつた。

伝統ある野球部は大正十五年夏の甲子園大会で前橋中学と延長十九回戦の末勝ち進み、決勝では満洲の強豪大連商業を二対一で破つて栄冠を勝ち得た。一行が凱旋した当夜は繁華街で大提灯行列を行つたのも忘れ得ぬ思い出である。

夏休みの行事であつた富士登山・富士五湖めぐり、伊豆半島(東海岸・西海岸を交互)めぐり、北アルプス白馬、鍾ヶ岳登山にも毎年大勢が参加した。特に伊豆半島

めぐりは人気があり、駿豆鉄道の終点であつた大仁から湯ヶ島まで歩いて一泊、翌日は天城峠越えの乗合馬車を見送りながら「伊豆の踊子」ばりの下田への長旅であつた。それから先の東海岸にしても西海岸にしても、道路はほんとに僅かで船以外は乗物もなく、毎日が山越え峠越えの連続であつた。

当時の学校では軍事教練も正課の中で、一・二年生は徒歩、三年生よりはエンピール・レガール・村田式・三〇年式・三八年式の銃を担いだ。校庭で行われた分列行進も各種歩兵銃の展覧会で、母校の創立の古いことを物語つていたが、今次の大戦で焼失してしまつた。運動会の最後を飾つた向軍に分れて戦つた攻城戦や歩兵第三十四連隊への宿泊、大谷射撃場の実弾射撃や安倍河原の演習も過去の思い出として残っているが、変動の昭和史への布石であつた感がする。

われわれの卒業式は昭和三年三月三日であつた。謝恩会が当時の静岡倶楽部で開かれた。進学するもの、浪人するもの、家事に従事するもの等それぞれ新しい人生に向つて進んでいった。

卒業直後三・一五事件が突発した。大正十四年に議會を通過した

治安維持法(昭和二十年十月廃止)による特高の左派に対する弾圧がはげしくなり、社会主義運動及び社会思想研究に対する取締りがきびしく、第二次大戦にいたるまでの間取締りや検挙が続発した。



第77回静岡43会(於静岡三笑亭)

昭和六年九月十八日柳条溝の満鉄線爆破を契機に満洲事変が勃発してからは世界も一変してしまった。満洲国の誕生、リットン調査団来訪、日本の国際連盟脱退と目まぐるしく変動していった。昭和八年には五・一五事件が発生し、わが国の世論も左派弾圧、極右主

義の抬頭に拍車をかけていった。

昭和十二年七月七日北平郊外で蘆溝橋事件が発生し、これが支那事変にまで拡大されてしまった。

上海事変・ノモンハン事変と次第に戦禍は拡大し、多くの級友も大東亜戦争から第二次世界大戦への渦中へと巻込まれてしまった。

満洲事変以降終戦にいたる間級友の中からも戦死者を出している。

戦後の混乱期を通して、それぞれ母国の再建復興に半生を捧げて今日に到っている。

今年丁度、卒業五十周年になる。去る二月二十五日静岡三笑亭で第七十七回目の四三会を開催した。集まるもの二十五名、関東より今井、田崎、芹沢、西沢の四名が参加した。例によって三笑亭特製のスキヤキで大盛会であった。

本年の大会にそなえて名簿の改訂、母校創立記念大会に併せて十月七日前後に四三会五十周年記念大会を開くことを決めた。また幹事の活動と会員の協力によって寄附金の割当額を突破し、残額も四三会の基金とすることになった。

四三会員は現在百十七名でその中二十七名が関東同窓会に入っている。物故者も五十六名になってしまった。関東四三会も昭和三十一年第一回を開いてより十六回開

催している。関東同窓会総会や各種の行事にも次第に多数の会員が出席するようになってきた。五十三年度の総会及び各種の行事及び母校創立百周年記念大会にも多数出席されるよう各位にお願いする次第である。

出席者名

尾崎邦二郎 永井 景 鷺巣恭一
矢部 孝 近藤伊佐男 松岡義平
堀田利郎 八木友治 滝口亀太郎
大石貞次 高須 彰 森下強三
松永清平 伊藤寿雄 出島輝夫
小倉準太 帯金鎮一 神谷俊郎
清水芳郎 磯谷幸一郎 小杉 一

今井志郎 田崎茂夫 芹沢正憲
西沢純三 以上関東
(西沢純三記)

四六回

俺とお前は同期の桜と申したいところですが、大正二、三年頃の生まれともなると、同期の梅干し位でしょう。静岡では毎年必ず一回は同期会を開いており、繁田君が張切って、面倒を見てくれて

います、四月に予定の会合は、丁度、同期の山本静岡県知事が再出馬を声明されているので、激励会になることでしょう。

一方関東支部の方は、一昨年夏

久し振りに十二名が集まって楽しい一時を過ごしましたが、以来やっおられません。昨年は連絡員の不行届きもあって、秋の予定を見送りました。今年こそは二年ぶりに開く可く計画中です。

四十六期の諸兄！近況をお知らせ下さい。お仕事のこと、家族のこと、健康状態、その他なんでもバガキで結構です。次の同期会で報告します。

(同期会連絡員大藤・阿部記)

四八回

二月十日、有楽町の日本倶楽部で関東在住者の集いを開きました。が、この日は特に静岡から新聞君も特別参加され、百周年寄附金募金の現状や、静岡の近況報告があり、特に亀山君の入院、重体の報告があった。(その後、三月十六日に亡くなられたとのこと。謹んで哀悼を祈ります)

次に原崎君より例によって関東支部の幹事会報告があり、そのあと懇談、次回のゴルフ会の予定などの打合わせをした。

杉本君は久しぶりの出席、会場をお世話下さった福永君は京成ホテルの専務で成田空港開港間近で止むなく欠席した。

当日の出席者は次のとおり。

飯田、大橋、太田、加藤、工藤近藤(希)、杉本、原崎、松岡、の諸君および山崎。

ゴルフ会

関東在住四八会ゴルフ仲間(約二十名)で春秋二回開催しているが、今回は三月二十日(土)に伊豆大仁カンントリー・クラブで行った。静岡在住の天狗連の参加を期待して、東京と静岡の中間の伊豆のコースを選んだ次第だが、いろいろな都合で静岡組は参加できず、関東側の八名、二組となった。

当日は天気も良く、早春にも拘らず暖かく、打ち出しの箱根コース一番ホールの正面には、美しい富士山が春霞の上に浮き出しているようでした。静岡時代、朝な夕な仰ぎ見た富士山には、何とも言えぬ親しさと思ひ出を覚えます。

一組は飯田、工藤、原崎、松岡二組は太田、加藤、平岩、山崎、十時三十分ティー・オフ、箱根・富士の両コースのワン・ラウンド各組ともお互いにホール・マッチ等で楽しい一日を過ごした。

当日のプレーのハイライトは、一組原崎君の箱根コース九番でのバーディー、二組では富士コース四番一九三米バー13のホールで全員がバー13、全員がプロになったよ

うな気分を味わった。なお、ベストグロスは九十四(山崎)。

今回のコンペについて、伊豆大仁カントリークラブ支配人安山君六六回には特別な便宜を計っていただき深謝します。

(山崎 記)

五二回

此の十月には母校創立百周年記念式典が盛大に行われ様として居ります。昨五二年半ば頃より在京同期生に募金の協力をお願いして今日になりましたが、在静岡の幹事よりの報告によれば、多数の諸兄よりの賛同により、昨年秋には一応割当額は本部へ納金出来た様で、此の誌上を借りて感謝の意を表します。

さて、我々在京同期会も一昨年十一月開催され、その様子は関東同窓会会報三号でお報せしたが、五二年はあつと云う間に過ぎ去った感で、会合を持ち得なかった事は残念此の上無し。

本年は百周年の事でもあり、五月には例年通り静岡での同期合同会が行われますが、静岡幹事の竹折りで、同日には同期物故者の慰霊祭が行われる様ですが、此の便りが誌上に出る頃には、諸兄がその折の感慨にひたっている事と思

います。五月には又、一二三(ひふみ)会ゴルフ例会が行われると聞いておりますが、私事で恐縮ですが、本年二月にちょっとしたギックリ腰をやって、未だゴルフセットをはめている始末で、それ迄に治るかどうかわから心配している次第、これも年のせいかな。

在京生のその後の変化は殆んどない様ですが、苦米地(アサヒレキセイ)が北海道より、本年一月下旬、本社へ栄転となり、東京に一人うるさいのが増えた様です。五月の静岡での五二期会の一人でも多い参加を今から希い、楽しみにしつゝ報告迄。(直原澄衛)

五三回

この二年許り幹事が支部活動に追われて同級会が出来ないで困っていた所、山菅君の尽力で四月二十八日新宿「今佐」で久し振りにしょんねえ仲間が集まりました。

出席者は大石、大橋、奥野、小野、畔柳、香林、桜井、島田、白鳥、杉山、園田、手島、徳永、橋本、益田、宗像、森下、山菅、月見里の一九名。久し振りであります身辺異動多き年頃ではあり、各自の近況等々の話に花が咲いた。

奥野君は昨年十一月胃を手術し既に先気であるが、これで体重が



前列左より手島、香林、大橋、白鳥、大石、橋本 中列 小野、畔柳、島田、園田 後列 月見里、益田、奥野、徳永、小菅、森下、杉山、桜井、宗像

53期 級 会

53・4・28 於新宿今佐

十五近減少して却て健康的になったのは良いが服がダブダブで困る由。白鳥君は当日二人目の係が生れニックネーム通りジーンサンになった。一方園田君は最愛の夫人を失って目下独身生活中。近々神奈川県に移る予定等それぞれの人生に友情を交わして和やかに話は尽

きず、お神酒のメートルも上ったが脱線事故は無く、九時頃お開きにした。

又、今回の世話をし貰った山菅君に感謝すると共に、今後の幹事役を頼もうという話が出て、参事者一同賛成一決した。同級生諸君からの連絡その他同君の方へ御

願ひして下さい。

尚、静岡の鈴木君・長谷川君が静岡の同級会に出席して呉れるように言って居ります。我々も百年祭の時に大いに静岡に行きましよう。

(月見里得知郎記)

五四回

五四季会の同期使りは、在京の友人を順次訪問して近況をお知らせすることを前号で約束したが、紙面の都合で掲載出来ない羽目になってしまった。三段程のスペースの所へ、近影を挟むと記事の分がなくなってしまう。そこで、五月二十日、静岡での五四季会に出席して得た情報を載せた。尚、六号では友人訪問を載せたいと思うが、掲載ご希望の方は小生宛に連絡下さい。

連絡先 03-1908-1325 卒業時及び最近の顔写真があると効果があると思う。この顔が、かつての〇〇とか××とか、どうせアダナでしか覚えていないだろうが、こうした方が懐しさも倍加することだろう。

さて、当日は所用で東京を離れるのが遅れ、会場の「あなこや」に着いた時は高山幹事の報告が始まっていた。大略は一〇〇年祭関

係で、幹事から既報の事であったから省略する。

続いて高橋募金委員長から募金に協力をとの要請があったが、高橋君のメンツを立てる意味からも出来るだけ協力してほしい。

安東君が乾杯の首領をとり、それからあつちでガブガブ、こっちでチューチューの大宴会。出席者は二十八名で、遠来の友は、名古屋から中山、東京からは安東・柴田(今井)・下山(西)・永原の諸兄と小生であった。

高橋副会長から、東京五四季会の結束、ならびに関東と本部の親交を深めることに尽力してほしいと懇請され、努力することを約した。

解散後、望月キンギョと秋山セシミツの両君が、医師会の会合のため遅れて到着、同所を二人を迎えて有志が二次会をひらき、そのあと、ブロック別にお目当ての穴場へということに相成った。

小生は渡辺(源)・杉山(富)・遠藤・高木の諸兄に連れられて中町の飲み屋へまかりこしたが、痛飲してダウン。高木君のはからいで彼の知合いである城東町の旅館へ厄介になった。城東町というのは演習をやった練兵場以後は知らないで、一帯の町並を見てもサッ

バリ方角の見当がつかなかった。

翌日、昔を懐かしんであちこち歩いて帰ったが、空気の爽やかさは東京に長く住んだせいか滅法旨く感じて、深呼吸しながら歩き、久しぶりに空気の吸い溜めをして来た次第。

諸君もなかなか静岡へ行く機会もあるまいがたまには静岡へ行くのもいいぜ。五四季会の友も静岡在住は結構多いから、訪問して歩いたら歓迎してくれると思うよ。五四季会の友だけは友情を裏切らない、いい人ばかりだと会の時のたびにそう思うから。

話は別だが、当日、隣席の永原君から、東京の有志が七月十日、同君の激励会を設けてくれることになったが、五四季会の諸兄も誘ってくれとの話があった。

静岡を離れている我々が、直接同君に協力することは出来ないの、こういう時にでも、旧交を温め、かつ同君の政界における活躍の励ましの一助にでもなればと思っている。その節はなるべく多数参加しようではないか。

とりとめもない記事になってしまったが、いまや各界のスペシャリストにもなれている文才ある諸兄、我が期からも畔柳・芹沢・鼠入各先輩の向うを張って一文を

ものしてはいいが。(庵原記)

五七回

卒業後三十六周年を迎え、我々同期もそろ／＼人生の一つの区切りの時期が近づき、すでに第二の人生、第二の職場にと踏み切られた友もちらりほらり。

先日私の知人が定年後わずか一年足らずで病没した。この人は勤続三十数年の猛烈社員で、何の趣味趣味も持たず、ただ仕事のみに生甲斐を持っていた。妻は去り二人の子供は父親を尊敬しつつも離れて行った。自分の持病もひた隠し、まさか自分だけはと信じていた会社から退社を宣言されたその後には、完全な孤独と無味乾燥の陰々たる日々が待って居た。ユーモラスも話題も微笑もない彼に誰れも近づこうとしなかったらしい。半年程たつて会った時、かつて、黒髪で鋭い眼を四方にらんと輝かせて居た彼は、白髪で眼の落くぼんだ弱々しい老人に豹変して居た。この人の人生とは一体何んであったのだらうかとつくづく考えさせられた。

自分自身の生涯の縮図を画いて見て、エゴにならずとも、自分自身をもっと大切にしたいものだと思つた。五十も半ばになると、自

分の優雅な楽しい老後を全うする為に、健康になる事、物事を全て明るく見る事、趣味を持ち一生懸命に打ち込む事等に徹して、心老いざることが処訓だと私は思う。

正月に自宅のある市で名士と称する者の新年の集があった。K中と言う県立の出身者が多く、「我が母校は八十周年を今年迎える名門校」との語に花が咲いた。K中の卒業生でない者は非常に惨めなムードに落込んだ。その話が永びくので私は言つてやった。「ナヌ八十年度と、まだ／＼まだよ。我が母校は今年一〇〇周年だ」。これで名門校の話は消えて行ったが、つくづく静中を卒業した事に誇りを持つと同時に、人前であまりエリートだとか、社会的地位とかで誇らしく胸を張るものではないと反省させられた。

先日、山手線の中で、前に座つて居た親爺がつか／＼と私の処にきて、「失礼ですが、静中を出られた堀江さんのお兄さんでございませんか」だと。よく見ると後輩の日君なのだ。「まったくの失礼、俺がその本人なのだ」。己の髪の毛の生長を数えないで他人の禿頭を見るからこの様な大間違をするのだ。だれでも年寄に見られるのは嫌だよ。同窓会には務めて

顔を出して、お互の変身を確認しようぜ。

五七期として編集幹事諸君の絶大なる御努力により、四七年には家族アルバム集を、五二年には思出の文集、ともがきを作成した。

誠に立派で貴重なるもので、私はベッドの本棚に置いて眠ることに、ひといいはニヤニヤとして居る。同窓の他期の方々も、是非作成の労をとられては心から思う。

さて、関東支部に属する五七期会は、今年四月十四日に東京駅八重洲口のホテル国際観光の「寿の間」にて岩井、堀江、酒井が設営係になり、三十数名の出席を持ちまして例年にも増して大騒ぎ。何時老ぼけて静かになるやら、皆目見当がつかない。

亦来る五月十三日には、静岡市の協会館にて、恩師も交え、一〇〇年祭もかねて同期会を設営中である。恐らく一〇〇名以上の昔の悪童の生き残りが集まる事と思われませんが、なんと亦、今から楽しい事である。

創刊号の「ごあいさつ」の内に宮沢会長が言われた、「年令を忘れ、仕事を忘れ、何時までも中学生でいられる心から楽しい会、そして共通のふるさと静岡の地に心

を浸らせる会」誠に美しい詞である。これを純粹に受け止められない人々、それはお気の毒な方々だと思ふ。毎年の会を常に生きる喜びの一つとして、素直に心の奥に、そっとしまつて置きたいものだ。(堀江隼人)

六四・六五回

週刊現代に「同期の桜」というページがある。それは読者から比較的読まれている読みものだそうであるが、全国各高校の同期で活躍している人達を毎週とりあげて紹介するページである。

話は旧聞に属するが、わが静岡高校六十四期生は一昨年七月その欄でとりあげられた。週刊紙四分の一頁のかこみ記事であるが、それでも週刊現代の記者氏が、当時東京弁護士会の役員室にいた私のところにきては熱心に取材をしていった。わざわざ静岡まで取材に行つてもくれたそうである。丁度その記者氏も、我々と同じ時代に中学時代をすごしたとのこと、

戦中戦後の波瀾の時代を育ったもの、互いに共通した感慨があり、取材にも気持よく応ずることができた。その際週刊現代の紙面にはかぎりがあるので、紹介された人達も同期の活躍している人

達のうち、ほんの一部でしかなかった。実際われわれ六十四期生はまさに只今働きざかり。あらゆる分野で活躍している人達は枚挙に遍がない。岩本君や野沢正憲君のように自分の経営する会社を大きく育てた人、望月坦君や森下君のように若くして一流企業の取締役

に昇進した人、益頭君や八木君のように一流百貨店の部長として活躍する人、井戸君や松下君や渡辺君、さらに鈴木明朗君のように大銀行の重要支店の支店長や本店の部長を勤める人、阿部君や望月等君のように学界で活躍する人、藤田君のように新聞社の編集局長として敏腕をふるう人など多士済々である。

例によつて例のごとく、今年も七月七日、一年一回、七夕さまに集りましょう、ということでは新宿「今佐」に集る。この夜だけは青春の時代にもどつて、歌いかつ駄弁るのである。(名波倉四郎記)

六七回

会報にあの話を書いたらどうだろう。六十七期会の幹事の朝比奈正三君から命令を受けた。

そうだ、「あの話」が出たのはたしか昨春秋、東京の新宿の小料理店に約三十人が集まつた同期会

のときだった。静岡から同期の野球部で名サードだった桜井昌一郎君が上京し、静岡静高創立百年の記念すべき年に甲子園で静岡を優勝させよう、そのために一年後輩で立教大野球部で巨人の長嶋監督などを引っぱつて活躍した宗野君が静岡野球部の監督に就任し、同窓会にも静岡を甲子園で優勝させる会ができたから、よろしくということだった。一同これに大賛成し、桜井君を激励したことは言うまでもない。

ことしもやがて夏の甲子園大会がやってくるが、地元静岡を離れて生活しているわれわれも、新聞の運動面の片隅にのる甲子園の静岡大会の記録をさがすのが楽しみだ。一回戦、二回戦、よしよし今年は調子がよさそうだ。準決勝、もう一息だ。そんな風に毎日の新聞が待ち遠しくなる。

静岡大会に優勝し、甲子園に駒を進めた年などは、会社の同僚などから、今年もやりましたね、と声をかけられる。そんなとき、思わず胸に迫ってくるのが「岳南雄児一千の……」という、あの心意気高い校歌だ。

創立百年の大会には、ぜひ甲子園で優勝してほしいと思う。桜井君の話でよかったのは、この「甲

子園で優勝しよう」ということにある。静岡で優勝しよう、そんな中途半端なものでないところがいい。あくまでも「理想は高し富士の山」だ。これが、われわれのよいうな中年の時代錯誤の願望ではなく、いま静岡に学ぶ青年諸君の誇り高き、しかも現実的な努力目標となることを、切に望む次第である。

そんな話がきっかけになって、われわれが学んだ当時の静岡一中内高が、いまになってみると、どんなにすぐれた学校であつたか、しみじみよくわかるという話になった。むろん、それは学校の施設や設備がよかったということではない。戦災で校舎焼失、終戦、三菱や住友の工場を改造した校舎から城内の連隊兵舎へ移転した時代のことだ。そこにいたのは腹をすかせた先生と生徒たちだけだったとさえいえる。しかし、そのときは先生も生徒も無我夢中で気づかなかつたかもしれないが、そこで、何かに向つて果立つていこうという内に秘められた元氣さ、とてもいったものがはぐくまれていたように思う。

もっとも、そんなことを思うのはわれわれが当時のわれわれとちやうど同じ年令の子供たちをもつ

ているからかもしれない。子供たちの通う高校と、われわれの静岡一中内高。ぜひわれわれの子供たちにも、当時の静岡一中内高のよくなよき雰囲気や味あわせてやりたいというのは親バカの心情だからだろうか。

「もう一つの甲子園」という話が出たのはそれからだ。甲子園で優勝するのはいい。ぜひその夢を実現してほしいと思う。しかし、それだけでは足りない。静岡一中内高が今日のわれわれをはぐくんでくれたように、静岡が現役諸君の心のふるさとになってほしい。そのためには、どうすればいいのか。われわれにできることはないのか―そんなふうに車座の話が進んでいった。

「教育は人なり」という。静岡を理想的な高校に近づけるためには、先生方にその気になってもらわなければならない。教育への情熱と静岡の教師であることの誇りをもつてほしい。そのために、われわれとしても、できるかぎりのバックアップをしよう。

さしたつて創立百年記念事業の寄付金のなかから先生方の研究費補助のようなものは出せないのか。静岡の先生になれば、研究費に不自由ないからということでは

県内のすぐれた先生が静岡に集まってくる、そんな自由でやる気のある雰囲気ができるなら、われわれとしても寄付のしがいがあるというものだ……まだ話はえんえんと続いたのだが、今回は、酒の席でもそんな書生論のとび出す中年の同窓会のひとこまを紹介するに終わらせてもらう。

(大石脩而記)

六八回

68期の在京同期会が近頃行われないので、同期同業種の近況をお知らせすることにします。

私達が実社会に出た頃は、朝鮮動乱後の不況期で、就職も不況に強い紡績・食品・銀行保険関係に偏ってしまったようです。でも同業同志のコミュニケーションには大変好都合です。

銀行組には、在京組だけでも日銀に稲葉満、住友に林明宏、八木貞夫、東海に河口浩、横山富士夫、第一勧銀に石川勝也、伊東良平、鈴木昭夫と八名もいます。

当人は若いつもりでも頭髪は益々薄く、デバラにメガネと胃の薬と衰勢は歴然。部下にも煙たがられ、といって上役も多勢いて頭の上らないことばかりといった悩みは共通のようです。でも皆、静岡

人に恵まれた先見性や広い視野をもって金融の一流コンサルタントとして活躍しています。

ところで、私の就職した第一銀行(現第一勧銀)には、創立者沢沢栄一翁が静岡にも縁の深かったせいか(静銀役員兼務)静岡出身者が多く、特に48年頃には、三人の静岡出身取締役——上杉一郎氏(現いすゞ副社長)、綾部立一氏(現安藤建設常務)、星野高麗男氏(現有終会専務)がずらり居並んでおられたことがありました。

今や各氏とも業界の重鎮として活躍しておられますし、先輩に続きで、我々68期銀行マンも支店長として活躍している者が出てきています。

金融コンサルタントとして、油の乗りきっている68期の金融マン利用して下さい。(鈴木昭夫記)

七〇回

関東同窓会七十回同期会を、去る一月二十七日(金)新橋「太洋」に於て、二年振りに実施した。

昨年内にと、九月頃より会場を探索するも、何せ総勢百名を越す大世帯、この内何名の出席があるか、期待と不安の会場探しは、すこぶる困難。今度も挫折寸前のところ、「会報四号」に五十九回の

先輩方の学友の店として「太洋」が掲載されていた。

早速会報片手に交渉開始。ご主人の好意で会場規模の不安は解消、やっと開会のはこびとなった次第。

当日は白石(沢野)通子さん、森野(堀内)芳美子さん、上田市



前列左より長倉(良)、白石(旧沢野)、教原、森野(旧堀内)、松浦(洋)、清(智)、佐々木、中列 中島、北原(卓)、吉田、小嶋(国)、北村(達)、割烹太洋のママ(城北女子高出身)、後列 遠藤(和)、鈴木(文)、斉藤(晴)、山田(恒)、西山、渡辺(勝)、横山、関岡、関(出席者数22名萩沢一清君遅刻の為記念写真に間に合わず残念)

より遠来の小島国彦君を含め二十名、六時半開始の予定が、各位多忙のため六時五十分開始(静岡時間?)、卒業以来の顔もあり、二十余年の歳月は、体軀や頭髪に変貌を与えて居り、すぐには顔と名前が思い出せない者多数。まずは形式通り乾杯の後、順次近況報

告、改めて顔を眺めれば、往時の面影浮かび出し、それからは次から次と懐古談に花が咲き、とめどがない。本日の思い出に一同オスマン顔で記念撮影。つきぬ話題に、なごり惜しみながら、再会を約して十時前お開きとした。

「当日の出席者」遠藤(和)、北原、北村(達)、小島(国)、斉藤(晴)、佐々木、白石(沢野)、鈴木(文)、教原、清(智)、関、関岡、中馬、長倉(良)、西山萩沢、松浦(洋)、森野(堀内)、山田(恒)、横山、吉田、渡辺勝美(関哲男記)

七二回

私達72期生、当年40/41才、まさに中堅で忙しい。この原稿も巡り回ってとうとう私のような間抜けな人間の所に来てしまった。

私共が入学した年は75周年だったから、あれから25年の年月がたっているとは、全く夢のようである。特に高校野球など始まると、年令を忘れて三年生のとき、入場式の後の第一試合で負けた日のことや、新しい中をスタンドで日やけを気にしながら応援したことが、昨日のようになり、テレビの前の自分は、いつの間にか高校生に戻っているのも不思議である。

私共72期生は静岡高女性史の中で

も特異な存在、つまり10名という最小の数であった。それなのに美人でもなく、頭の悪い私などは皆さんの頭には浮ばないだろうからまず自己紹介をしようと、私が静岡で目立ったことはたった一つ、75周年の行事で公会堂で音楽会を開いたとき弦楽四重奏の第二ヴァイオリンをやったことだけ。あとは男性から誘われることも、ラブレター一枚来るでなし、親は安心の反面、不安だったことと察する。

72期女性には、毎年春休みに母校同窓会館の和室を利用していただいて、おしゃべり会を持っていた。ところが今年は私が体を悪くしてとうとう開けずじまつた。

でも幸いに10名そろって結婚し皆さん〇×夫人として堂々としてゐる。静岡出身者を夫にしたのは三名あとは他府県人であるが。

子宝に恵まれたのは小早川さんの四人。〇人の人もいて平均二人のママである。仕事と主婦を両立させているのが五人。十人の女性も人生さまざま道を歩み、既に未亡人となられた人もいるし、私のように40才の入口で大病した人間も三人いる。

先日72期生の名簿をいただき、皆さんそれぞれ活躍されている様子うかがわれ、まさに人生の一

番忙しい時期なのだとつくづく感じた。20才の顔は親の作った顔、40才の顔は自分で創った顔。今皆さんにお会いしたら、それぞれに創られた立派な顔が並ぶだろうと想像される。しかし、何はともあれ、健康第一。企業の中でも社会でも期待されることが多々あるでしょうが、ホルモンの変り目である私たちは、一人一人が十分に健康に注意されることを、私の体験から申し上げたい。

同窓会や同期会で再会できる日を楽しみに、このへんな文章とをじさせていただく。

みなさん元気でがんばりましょう。
(高橋悦子旧姓持田記)

七三回

ここ数年、関東支部の総会に出席して、先輩諸氏の間に入ると、まだ「ガキ」の部類に属するんだと痛感させられますが、今年は四十才の成年組に入るのがわれわれ73期生です。

73期の諸兄姉は、社会・会社においては何におよばず、家庭においても、使い、使われごろとしてオイソガ氏の様子です。声はすれど、今だ同期会は開かれておりません。総会後の二次会・三次会が同期会の様な型になっておりま

す。そして、二十年以上も時は流れているにもかかわらず、昔の美貌を失なわない不思議な女性、伴野孝子さんが毎年出席されますから、われらが青春の話題は事欠きません。

昨年の夏は、この同期会(?)が声を掛け合って、武蔵の豊岡で十数名でブレーしました。シングルもいればビギナーもいて、あの深いパンカーに悪戦苦闘していました。暑い夏の日の汗が、いつになくさわやかだったのは、天気のせいだけではなかった様です。

又73期の幹事の宗像純司君(日本医大)が附属病院にいたので、何かと体の不調を訴え診察を受けて、「酒の飲み過ぎ、節酒を命ず」と診断された連中が集まって、ヤブ医者(?)を囲んで逆療法、銀座、赤坂、六本木と朝まで飲んだ事もありました。

静岡を卒業して二十数年、時の経つのは早いもので、数えてみて驚ろいている次第です。

今年はわれわれは前厄の年でもあるし、ゆとりを持てる年ではないが、せめて、むかしの仲間と語り合う機会を作ろうではありませんか! 今年は記念行事もある事ですので、静岡の連中とも声を掛け合って、一度、盛大に同期会を

開こうではありませんか!

宗像君に代わって近況を報告しました
(望月公善記)

七九回

今年は静岡の創立百年祭だそう。わが卒業年度は八十万円のノルマ。私も東京在住者に声を掛けてくれとの依頼がありました。何人かにはお願いしました。しかし、百年だから金を出す必要もないのだし、べつに書類を送りませんでした。先日、八十万の目標を達成したとの話で、ひと安心しました。静岡にいる人達は大変でした。一口五千円で集めたのですが、その後、一万円にしました。一年上の七八回生は早々と達成したとのことで、世話役も一生懸命でした。ごくろうさまでした。

私は高校を出てから東京です。静岡での生活と、もう数年で我が人生の半分になります。都会生活になれたせいか、静岡へ帰って、一杯やると、都会の無関心さに魅力を感じる反面、東京では、人恋しさに関東同窓会の幹事を引きうけている次第です。「いなか」ふるさと」があるだけでも、しあわせ、かなと思ったりしています。

(上田尚亮記)

八一回

八十一期の皆さん元気にやっていますでしょうか。今年春の選抜高校野球は浜松商が優勝し、久しぶりに故郷静岡を思い出し高校生活が懐かしく感じられました。今度は夏の大会ですが、今年こそ静岡は甲子園へ駒を進め、創立百周年に花を添えて欲しいものです。そして、皆さんと肩を組んで逍遙歌を歌いたいですね。

所で私達も高校卒業後十三年たちそろそろ関東在住者の同期会を開いてもよい頃かも知れません。去年は静岡で同窓会が開かれましたが、やはり東京から駆け付けた人は少なかったようです。

静岡の幹事が作成した名簿を見ますと、都内及び近県に在住の同窓生は約七十五名居ることになっていますが、関東同窓会の名簿には同窓生は二十六名しか載っていません。次の関東同窓会にはもっと多くの人に出席して欲しいものです。

ついながら同窓生がよく行く飲み屋などがもし御座いましたら会報においてでも教えていただければ幸いです。同窓会以外でも親交の場を持ちたいものです。

(宮崎太加志)

その後の支部活動

五二年一月二五日 幹事会

トップバンムーアに会長以下三三名が集り、五二年の総括と五三年の予定等を話し合った。

五三年の方針としては五二年同様とし、関東で特に百周年記念行事の企画は行わない事とした。

五三年新年会は一月一三日、又は同二十日とし、会費五千円、会場は事務局に一任することになった。

事務局から会計報告を行い、今年度年会費納付状況の説明及び期別会費別納付実績を配布した。

静岡バスケット部東京遠征が披露され、柳川副会長が激励する事になった。

五三年一月二十日 新年会

午後六時から丸の内東商スカイルームに於て、二六回土屋正三氏以下三八名が集り、六八回荒谷さん、七一回後藤さん等婦人会員の姿も見られ、和やかに新春を祝った。

三月八日 幹事会

トップバンムーアに三十名集合、先づ、先日逝去された李家孝氏を追悼して黙禱した後、本年度会報名簿作成、総会及びリクリエーション行事等を審議した。

総会は六月二日(金)、会場は築地スエヒロ、パーティーは昨年同様郷土食会とし、会費について論議があったが、三千円案に決定した。

リクリエーション行事としてゴルフ・麻雀・ハゼ釣会を行う事とした。

四月二十四日 幹事会

トップバンムーアに四一名集合、役員改選、五二年度会計報告、百周年記念事業関係総会準備事項等を審議した。

役員改選については、会長より現幹事長を中心として六十回以降の若手役員を編成する案が提案されたが、若手から現役員の再任が懇請され、承認された。

計 報

各期でご活躍の皆さんの中で、左記の方々が逝去されました。謹んで御冥福をお祈り致します。

特に、本会設立当初から顧問であり、江の島会会長でもありました李家孝氏(27期)のご逝去は、その社会的実績からみて、惜しまれてなりません。

青木喜一氏(36期) 52・11・5
李家孝氏(27期) 53・2・18
小池亀吉氏(35期) 53・3・2

田中正治氏(45期) 53・3・2
碓井竹夫氏(36期) 53・4・23
市川 嶽氏(39期) 53・5・1

編集後記

今年から会報委員に従来の庵原・青木・飯田・上田の各氏のほかに、六八回雨宮明生・六九回原田淑子の二氏を加え、本号は若手委員主体の企画編集としました。
一味違つて面白いものになって居れば幸いです。皆様のお声を期待すると共に、投稿して下さい。
皆様と委員諸氏に感謝する次第です。
(月見里得知郎記)

会 報 (第五号)

昭和53年6月2日 発行

編集人 月見里得知郎
発行所 静中・静岡
印刷所 庵原印刷所

トッパン・ムーア株式会社

取締役社長 宮澤 次郎 (42回)

東京都千代田区神田駿河台1-6
TEL (295) 2411 (大代表)

鈴与株式会社

取締役会長 鈴木 与平 (44回)

清水市入船町3丁目12
TEL (0543) 53-3111 (大代表)

株式会社 講談社

取締役社長 野間 省一 (44回)

東京都文京区音羽2-12-21
TEL (945) 1111 (大代表)

凸版印刷株式会社

東京都台東区台東1-5-1
TEL (833) 2111 (大代表)

保険代理業 (特別総合代理店)

株式会社 京華商会

取締役社長 岡本 敏興 (32回)
専務取締役 今関 智吉 (47回)

本店 東京都千代田区大手町2-2-1 TEL (241) 7751
分室 東京都千代田区丸ノ内3-3-1 TEL (211) 7831
大阪支店 大阪市東区淡路町1-12 昭栄ビル内
TEL 06-201-3224

株式会社 東電社

取締役社長 岩波 信平 (42回)

東京都中央区日本橋2-1-21
TEL (271) 2701 (大代表)

合同酒精株式会社

取締役副社長 堀 豪三 (44回)

東京都中央区銀座6-2 合同ビル
TEL (571) 8641 (大代表)

本田技研工業株式会社

取締役副社長 川島 喜八郎 (52回)

東京都渋谷区神宮前6-27-8
TEL (499) 0111 (大代表)

新日本証券株式会社

取締役副社長 大石 巖 (53回)

東京都中央区日本橋1-17-10
TEL (273) 2311 (大代表)

日本レーベル印刷株式会社

代表取締役 岩井 平一郎 (57回)

本社 静岡市国吉田645
TEL 0542 (62) 1111 (代)
東京 中央区京橋1-2 越前屋ビル
TEL 03 (272) 4651 (代)